

小児がんと子どもの気持ちを 看護師はどうやって理解する？

駒沢女子大学
看護学部 秋田由美

小児がんの小中学生には 何が起こる？

数カ月～
1年以上の
長期入院

入院中、多くは院内学級
などで学校に通う = 転校

治療には吐き気や脱毛等
の副作用

再発の危険性、死の不安

今まで通っていた学
校の友達や自宅近く
の友達と会えない

自分より小さい子が入院
しているから辛くても言
えない、甘えられない

同じ病気の友
達が亡くなっ
てしまった。
私も…？



小中学生の気持ちの理解は難しい…

子どもの思い

- 再発の不安や、一緒に入院していた友達の死を経験しても話しにくい
- 看護師には本当の自分を見せられない
- 看護師の対応に気持ちを理解していないと感じる



看護師の思い

- 子どもの気持ちの理解や尊重が難しい
- 子どもと親の意見の違いなどに葛藤する



何とかしたい…でも、
どうしたら本当の気持ちを話してくれる？

経験豊富な看護師はどうしているの?? 病院で調査（フィールドワーク）

看護師がどのように子どもと関わっているのかを見る



見せてもらった後に、どうしてそういう関わりをしたのかを聴く



看護師の関わりを繰り返し見て、話を聞いて
分かったことが6つ

看護師が子どもの気持ちの理解のために 行っている6つのこと

1. **子どもの生活にアンテナを張り、その子らしさを捉える**
2. **見えにくい「子どもの世界」を知る**
3. **子どもが「話しても良いかな」と思える人になる**
4. **子どもが子どもなりに考えて発信できる機会を作る**
5. **覚悟を決めて子どもからのサインを待つ**
6. **ポロっと出てきた子どもの言葉を取り逃がさずに動き出す**

1. 子どもの生活にアンテナを張り、 その子らしさを捉える

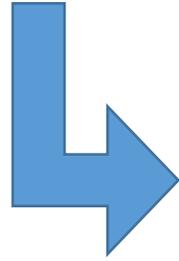


「この子どもがこんなかわいいことを言っていた」とか
「やっていた」とかってなんとなく情報共有したくって
「あ、余計だな」って思いつつも言っちゃうことはよく
あります。

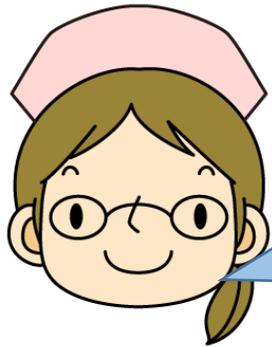
子どものキャラクターや好み、「いつものその子の様子」を
看護師みんなで共有

→ 何かあった時 「いつもと違う子どもの様子」に気が付く

2. 見えにくい「子どもの世界」を知る



子どもが入院する前の子どもの生活、入院中も続いている仲間関係、子どもが考えている自分の将来像など

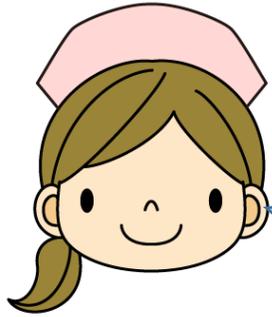


子どもの体調がよくなって、ナースから見ると「問題なし」という時に「本当に何もないの？」と子どもの言葉を聴きに行く

子どもの体調が悪い時は、話す内容も体調優先

➡ 体調の良い時にあえて時間を作って話を聞く

1と2で、その子らしさや「子どもの世界」を知っても、
子どもの気持ちを推測できても正確に理解できない



推測はこっちが勝手に思っ
ているだけかもしれない

最終的には子どもの言葉で
確認する



子どもが話してくれるために3と4の関わり→

3. 子どもが「話しても良いかな」と思える人になる

- 「あなたのこと知ってる知ってる」「あなたに関心持ってる持ってる」とアピールして子どもに近づく



些細なこだわりを知っておいてあげるっていう…例えば
〇ちゃんだったら、お風呂に入るときにはお湯はためない、シャワーだけ。かつ、椅子がほしいみたいな。

- 子どもの意見を聴いて「その子だからのスペシャルケア」
- 子ども：「看護師さんは忙しそうで話しかけられない」
→ 看護師が忙しくない「余白の時間」を作って話す

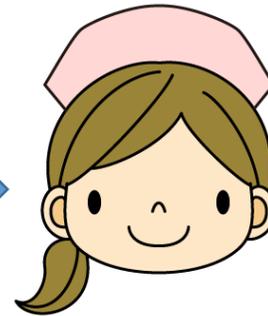
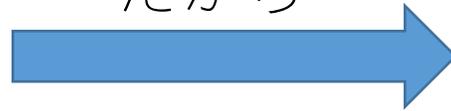
4. 子どもが子どもなりに考えて 発信できる機会を作る

子どもの表現する力や表現しようと思う気持ちを育てる



病院生活は
受け身になりがち

だから



今日の予定は？

今日は何する？

子どもが考えた予定を尊重

子どもが決めた予定を実行できるようにサポート
子どもが「自分でできる」と感じられるようにする

5. 覚悟を決めて子どもからのサインを待つ

3と4で子どもが話しやすいように関わったら、あとは待つ
看護師が改まって聞くと、子どもの本音を聴けなくなる

看護師が持つ

「何か言いたそうだな」
という感覚

言葉、視線、試すような
しぐさ等、いつもと違う
子どもの様子に気付く

「何か言いたそうだな」という感覚があった時には、話しやすい環境を作って、待つ

お風呂に一緒に行くとか、何かこう、べったり2人でい
る環境があるとポロポロっと出てきたりはするように
思っているんです。で、あえてしゃべらずに待つ



6. ポロっと出てきた子どもの言葉を 取り逃がさずに動きだす

特にターミナル期には、子ども自身が「おかしい」と感じたタイミングを逃さない

(子どもが自分の身体に) 疑問を持った瞬間、(こどもが) 知りたいなと思った瞬間を逃したくないなっていう気持ちはすごくあって



自分の中で準備していても、お医者さんたちとかを巻き込もうと思ったらやっぱり子どもからの言葉はとても大きいですね。「彼(子ども)が『なんでこうなるんだろう』って言っている。これは答えないといけない!」って人を動かせるので、その言葉はもう絶対に取り逃がしたくないって思う

わかったことから考えたこと

「子どもの世界」を知る「余白の時間」「余計な話」

- 忙しくない「余白の時間」だから話せる話
- すぐにケアに直結しない「余計な話」が、「いつもと違う子どもの様子」や「何か言いたそうな雰囲気」に気付かせる

子どもの気持ちを聴くための2つの「待つ」

- 子どもが自分の言葉で気持ちを話すことができるように積極的に関わりながら「待つ」
- 看護師からは質問をせずに静かに「待つ」
子どもが時と場所、言葉を選び、語ることで出てくる本音